史的唯物論の適合性（中）

――複合的な歴史観と史的唯物論――

小林彌六

前稿の末尾で数多の社会の構造とその変動、歴史の法則を掌握するためには社会を構成するさまざまな要因の存在を直視する必要があることを確認した。もちろんそれらの要因がそれぞれどのような性格を有するかを理解する努力も大切である。ところでどのような要因が存在するのであろうか。マルクスは下部構造とされる経済のほかに、「社会的、政治的、精神的生活諸過程一般」（『経済学批判』「序説」）「政治、法律、道徳、宗教、形而上学などの言語にしめされるような精神的生産」（『ドイツ・イデオロギー』古在由重訳、岩波書店三一頁）を挙げている。ちなみに親族・家族については上部構造であるのか下部構造であるのか判別しにくい面がなくもない。生命の生産・再生産にそれらが強い繋りを持っているからである。エンゲルスは「歴史を究極において規定する要因は、直接の生命の生産と再生産とである。しかし、これは、それ自体さらに二種類のものからなっている。一方では、生活資料の生産、すなわち衣食住の対象とそれに必要な道具との生産、他方では、人間そのものの生産、すなわち種の繁殖がそれである。」と述べている。この論点にここでは深く立ち入らないことにする。[1] エンゲルスはまたシュタルケンブルグへの手紙で

「政治的・法的・宗教的・文学的・芸術的等々」の要因を指摘している。

経済のほかに親族、社会、政治、宗教、思想、芸術、意識などの要素が存在するとしてまず問題になるのは、それらの要素がどのような性格をもつかである。さらにはそれらが相互にどのような関係にあるか、ひいてはそのような諸事情を含めて全体として社会がどのような構造を持っているかを知る努力が必要になるであろう。このような課題に取り組むばあいに経済決定主義・極端な経済還元主義の弊に陥るのを避けるとすれば、それぞれの要素が帯びている個性をはっきりと摑むことが強くもとめられる。これを別の角度からいえば、それらの要素あるいはシステムないし構造がもつ性質・属性を明瞭に認識することが大切だということである。これらの要因は通例他の要因となんら関わりを持たず全く孤立して存在するということはない。互いになんらかの関係をもっている。その意味ではそれらの要因が完全に自立して存在することは殆んどありえない。ただそこから構造主義がしばしば陥りがちなように、全体の仕組み・構造を定めるのは要素システム間の関係だけだとするのは偏り過ぎてしまう。相互関係が取り結ばれているにもかかわらず、それぞれの要素・システムは個有の性格・仕組み・傾向を持っているのである。アルチュセール・バリバール、プーランツァス、ゴドリエらのフランスのマルクス主義者が主張する「相対的自律性」[2]は、この点を注視しているわけである。下部構造としての経済過程が「自律的」と解されるのはマルクス主義の系譜のなかにあって当然であるが、それに限定されず「上部構造の相対的自律性とその独自の有効性」[3]を強調する点によってこれらの人々がマルクス主義の発展のために貢献したところは非常に大きい。資本論体系が経済学の体系であり、マルクスは宗教、親族、意識、社会等について立ち入った吟味・研究・学問体系の形成を行わなかった。マルクスはまた国家・政治・支配についても本格的な理論形成にまで進まなかった。そのためにマルクス主義では伝統的に経済外の上部構造

的な諸要因に対する評価が軽くなりがちであった。極端にいえばそれらは生産力・生産関係などによって構成されている経済の反映形態と考えられたり、そうまでいかなくともとかく軽視されがちだったのである。下部構造とされる経済の占める位置は大きいにしても、その仕組みや動向によって社会のあり方がすべて決定されるわけではない。政治、宗教などのあり方によって社会の状態が多様に規定される面があることは否定できない。このことは突きつめてみれば、それらの経済外の諸要因にも「自律性」が備わっていることにもとづくところが大きい。

マルクスやエンゲルスが比較的に未開拓のままに残しておいたこれらの諸要因をめぐっては、どのような領域で詳細な研究が行われているのであろうか。宗教学や心理学等ですでに豊かな蓄積がなされていることは容易に推察がつく。これらの諸要因を対象とする学問の諸領域での内外の豊富な成果が摂取・活用され、歴史法則の解明のために役立てられることが望まれるであろう。また現在、史的唯物論の是否をもテーマとして意識しながら歴史法則の究明に交錯しやすいかたちで研究成果があげられている領域として、文化人類学・経済人類学・社会人類学や社会学、歴史学などが念頭に浮ぶ。マルクス死後の百年程の間にそれらの領域での情報は際立って豊かになっている。それを摂取し手掛りにしながら当面の課題に取り組むことが大切であろう。この百年程の間の情報の増加はこの間の技術・生産力の飛躍的な発展に似たところがあるといえる程である。

親族、宗教、支配(政治)、社会、意識などの性格をそれらの「自律性」に着目しつつ理解することが差し当っての課題となろう。繰り返えし強調するかたちになるがこれらの要素ないしシステム—これらのなかで支配（政治）は少し性格が違う—は多くのばあい経済生活をより根元的な要素として持っておりそれから派生的に生まれてくるとか、その特殊な現象形態であるというわけではない。それぞれが経済生活と並んでそれ自体として存在する理由・発生す

る固有の理由があって発生しかつ存在している。ヒトが動物的な状態から幾分なりと人間らしい状態に移りつつあった二百万年程前の時代から、意識とか宗教的意識というような要素は芽生えつつあったのである。ではその前の四百万年前とか五百万年前はどうだったのだろうか。現在得られている人類進化学の知見によれば棲息しているものは霊長類でしかない。高等霊長類であっても、のちのヒト科に較べると脳の発達はずっと低位にとどまり、したがってヒトが持つような意識・意欲・宗教的意識等を持たなかったであろう。道具の利用も殆んどないに近かったであろう。もちろん生存するからには食物を摂取するとか群棲するということはあったであろう。したがってごくごく原始的な経済生活や血族・社会生活に類するものはあったといえるかもしれない。しかし意識・宗教・意識・言葉などは殆んど持たなかったといって良いであろう。ここで注意しなければならないのは霊長類その他の動物とヒト・人間とが区別されるメルクマールは何かということである。もちろんこれは古来からさまざまな機会にまたさまざまな人々によって繰り返えし問い直されてきたテーマである。ヘーゲル流にいえばその答えは人間が意志をもち精神を持つようになったということである。マルクス流にいえば手を使いあるいは道具を用いて生活手段を生産するようになったということである。

マルクスとエンゲルスは「人間自身は、かれらがかれらの生活手段を生産しはじめるやいなや、自分を動物から区別しはじめる」[4]と『ドイツ・イデオロギー』で書いている。「生産」「労働」こそが人間を動物から区別すると考えていたことは確かであろう。そこから進んで「意識が生活を規定するのではなく、生活が意識を規定する」というテーゼが導き出される。また「人間の頭のなかのもやもやした形成物もまた、かれらの物質的な、経験的に確認できる、そして物質的前提にむすびついた生活過程の必然的な昇華物である」[5]と考えられている。同じ主旨であるが、「かく

て道徳、宗教、形而上学その他のイデオロギーおよびそれらに対応する意識形態は、もはや独立性のみせかけをもたなくなる。それらはなんら歴史をもたず、なんら発展をもたない」というように大変に強い調子になっていく。歴史哲学・精神現象学などに象徴されるヘーゲル流の極端な観念論への批判の見地から、「生活が意識を規定する」という唯物論が提起されている。それはそれとして意味があるが、人間が自らを動物と区別し始めるとされる「生産」「労働」自体がじつは意識によって裏づけられていることも否定できない事実である。ヒトは「生産」を始めるまえにおそらく「意識」を持っていたであろう。なんらの意識・判断もなしにヒトが生産を行うようになったとは考えにくい。たしかに動物は殆んどといってよい位、生産を行わない。その理由はどこにあるのだろうか。生産のために手を使わないところにあるのだろうか。採集のために手足を使うことなら他の霊長類でもある程度はあるといえそうである。ポイントはヒトが大変、意識的に——本能によるだけでなく——採集・狩猟・生産のために手を使うという点にあろう。『資本論』第一巻第三節第五章「労働過程と価値増殖過程」の第一節「労働過程」でマルクスはつぎのように記している。「人間だけにそなわるものとしての形態である労働」にかんし、人間は労働をとおして労働過程の始めに「心像のなかには存在していた」「彼の目的」を達成する。つまり始めから「観念的にはすでに存在していた結果」を労働をつうじて引き出すのである。この意識性・合目的性こそが人間の労働を特徴づけるものであるという。この指摘によって確認されているように「生産」そのものがじつは意志・意識によって裏づけされている。しかもそれはヒトの行動なればこそなのである。動物から人間を区別するメルクマールである「生産」にじつは「心像」や「目的」が前提され基礎になっている。この事実からすれば、人間を人間らしくしているものは生産で、意識は生産によって支えられている生活の「昇華物」である、意識の独立性は「みせかけ」にすぎないと意識の独自性を抹消しようとす

るのはかなり強引な無理を伴う処理なのである。

一般の動物でも本能に導かれてであれ採集や捕獲などの行動をある程度は行う。それらが人間独特の生産に転じる契機はその行為の意識性による。とすれば人間が他の動物と明確に区別される契機としてその意識性・意欲・思考力等が浮び上がってこざるをえない。もともと霊長類のなかでひとつだけユニークな種としてヒトが現われるようになったのは直立歩行するようになり脳が大きく発達し手を使えるようになったことによると推定されている。脳の容積が大きくなり大脳皮質が増加することによって脳の機能が高級化した。そのため「人類独特の思考、言語、記憶、手の精密な運動などが可能となったのである」[6]とされる。手が使えるようになり、他の動物より工夫して巧みに生活手段を獲得することができるようになった。ということはヒトがヒトらしくなった最大の決め手はなんらかの契機・理由からかヒトがたまたま直立歩行するようになり、脳の容積が異常な程に大きくなったためその機能が飛躍的に向上したことにもとめられる。火の利用、道具の利用などにしてもこれにもとづいていることは明らかである。

ヒトがヒトらしく、あるいはヒトが人間らしくなったのはなによりもまず脳の特異な進化にもとめられる。そこから他の多数の動物とははなはだしく区別される行為群・事象群が生まれてきた。その行為群のなかのひとつ——もちろん非常に重要なものではあるが——としてマルクス・エンゲルスがいう生活手段を「生産」するという活動が開始されたといえよう。この事実からすれば生産だけがヒトのヒトたるメルクマールと考えることにはどうしても無理が伴う。脳の特異な進化こそがヒトのヒトたるメルクマールになろう。あるいはそれにもとづいて起こる思考・言葉・概念の創出・制度・法規の創出・道具・技術の創造と利用などに、ヒト科の特徴が色濃く表われているといえる。もちろん生活手段の獲得についても、思考力・知識・技術の利用・道具の創出と利用が伴うようになる。経済活動にも

思考力・意志・意識などが大変に重要な要素として入り込んでいる。人間のさまざまな行為・創出物には殆んどすべてといってよい程に、なんらかの仕方で人間の脳髄の働きが滲透しており絡みついている。

このことに関連するといえようか、マルクスとエンゲルスも上述の「生産」という動物と人間のメルクマールを定置する文章のすぐ前に、「人間は意識によって、宗教によってそのほか任意なものによって動物から区別されることができる」とも述べている。「意識」の存在を全く貶め軽視してしまっているわけではない。それどころではない、人間をめぐり社会・歴史をめぐり意識に関連することが余りにも多いだけに、意識とは何か何に発するのか、何によって規定されるのかを大変な精力を傾けて究めようとしたといえるのではなかろうか。人間の脳の特異な働きは、人間を他の動物から区別する決め手になるものである。しかもその働きはたんにそれを取り巻く環境からの神経をつうじての脳への働きかけに対する単純なる反射——ガラス板が光線を反射するような——にとどまらない。刺激を受けた脳髄は情報の解析・判断・感情の決定・論理的な認識・対応のための意志決定などの高度に複雑な機能をはたす。それを可能にする複雑極まりない機能力を脳は持っている。頭脳の判断は多様な環境からの広角的な刺激によって行われる。もちろん食べたり着たりするための経済活動とそれが直接に関わる限られた環境の部分に対してだけ、反応し判断するわけではない。他の多彩な人間の行動・広範な環境からの刺戟によっても、反応・判断・意識の形成を行う。さらにそのような機能をヒトの脳が果たすばあいにまったくの空白から始まるのではないということが注意されねばならない。ヒトの脳は予め独特の構造・機構を賦与されている。——レヴィ・ストロースもそのように考えている——その機能の回路や機能の型も独特な定まり方をしている面が強いと思われる。そのため人間の脳は、その特殊な構造・機能のゆえに特殊な意識や表象を創り出す強い傾向を帯びているのではないかと考えられる。詳しくは心理学

や大脳生理学などの成果・研究に学ばねばならないが、ともかく人間の意識・心理・表象・宗教・文化などを脳の構造が規定する面があることは間違いないところであろう。十九世紀には心理学や大脳生理学の発達は殆んどといってよいほどみられなかったから、マルクスやエンゲルスがヒトの脳の構造・機能を独立の因子として考えなかったことを責めることはできない。しかしさまざまな諸学の高度の発展を見た今日ではこの事実を無視して良いことにはならない。社会科学の研究にとっても今後の非常に大切な課題であろう。ともかく人間の頭脳は特異に高度ではあるが、一面では機能が一定の範囲に限られがちである。しばしばそれは特有のブレを伴いつつ、経済だけではなく他の多彩な人間の行為・生活・人間を取り巻く広大な自然その他の環境に反応・判断し意識・意欲を形成するといえよう。

人間のあり方にとって脳の働き・意識・判断などが重要な役割を果たすということからすれば、宗教・道徳・言語・形而上学・政治などのマルクスのいわゆる上部構造が人間特有の創造物であることはその自然の帰結であるといえる。もちろんそれらのすべてが経済的諸関係の反映ないしはそれに関わるものとして発生ないしは造り出されているとはいえない。上部構造は経済生活・経済活動に関わりそれによって規定される面もあるけれど、到底それだけには限られず独自性・自律性を有することを認めないわけにはいかない。上部構造を生み出し持つということは、人間の動物とは決定的に異なる特徴——意識的な「生産」・経済活動を行うことと並んで——であるといえる。人間が動物と異なる最大の特徴は「意識」・意欲を持ち、意識的な行為を行い意識に導かれて多彩な物を創り出すという事実にもとめられようか。

この点からすれば、種々の上部構造的な諸要因が生み出され創り出されてくるのはそれ自体として必然である。それらが生み出されるのは経済生活がまずあってその反映形態に限られるわけでもないし、経済生活から派生してのみ

それらの上部構造が生じるというものでもない。人間が生存するということはたんに食べ着、住むだけではなく、同時に感じ意識し語り群れ集う等のいわゆる上部構造に強く繋る方面の生活・活動をも行う。下部構造とされる経済活動の中にも、感じ意識し行為するという側面は不可欠の要素といってよい位介入している。ある財貨を欲しそれを生産によってあるいは交換によって獲得しようとするにしても、必ず意識・意欲・意志等の精神生活の面が絡んでいる。一例を挙げれば交換過程についてマルクスも商品所有者の意志の契機を重視しており次のように述べている。「商品は、自分で市場に行くことはできないし、自分で自分たちを交換し合うこともできない。……一方はただ他方の同意のもとにのみ、すなわちどちらもただ両者に共通な意志行為を媒介としてのみ、自分の商品を手放すことによって、他人の商品を自分のものにするのである」[7]。さらにすすんでいえば、下部構造のなかにも上部構造的な諸要因は滲透しかつまたそれを支えている面が多いのである。経済活動・下部構造たりとも人間の活動であるからには当然といえば当然なのであるのだが。

そこでまず親族、宗教、政治、社会、意識等の性格を吟味してみることにしよう。最初に親族をめぐって。ヒトも生物であるからには性生活・生殖・育児などを欠かすことはできない。さもなくば種の維持も不可能なことは改めていうまでもない。また生物の本能としてそのような活動をするようにヒトは根強く規定されている。霊長類の多くがそうであるように、ヒトも群れ生活を営むことによってそれが可能になっている面が強い。群棲も本能的な傾向といってよいのではないかと思う。マリノウスキー、ラドクリフ・ブラウン、レヴィ・ストロースらを始めとする人類学の精力的な探査・研究によって教えられることはヒト・人類はじつに精巧な親族組織を作り上げているという事実である。言葉を換えればヒトは本能に触発される性生活・生殖・哺育などの生活をするにしても、本能に導かれるまま

に場当り的に幾分か乱雑にそのような行為をするわけではないということである。発達した頭脳によって意識し判断し、他の諸種の生活の側面とのバランスを保つようにさまざまな配慮をしている。発達した脳はヒトの社会集団をある限られた範囲の――せいぜい数十人位らしい――「顔見知り」の集団にする強い傾向を持っている。その集団の成員として認知されるには一定の要件がもとめられるし、成員同士ではもちろん互いの顔は――もちろんそれぞれの個人の諸々の属性――良く見知っている。またその範囲で調整をとりながら協力し合い生活をしている。親子関係その他でもお互いを結び合う心の絆を持ち、集団へのアイデンティティ――デュルケムが強調するような――を持って生きている。

エンゲルスがいうような――モルガンにしたがって――「乱婚」は殆んどなかったようであり、近親婚禁忌についてレヴィ・ストロースが明らかにしたところによると、婚姻は他集団との親和関係の維持を顧慮して集団間での女性の交換として行われる。もちろん婚姻は集団の成員のあるいは社会的な認知にもとづいて行われねばならない。迎え入れられる女性はそれによって集団の一員として生活するのを認められるのである。交又イトコ婚その他の驚く程に整然とした婚姻の方式が随所に見出される。出生する子供の集団への帰属の方式もまたさまざまでありえ、いずれにせよ集団への帰属によってその成長・生活は保障されるかたちになっている。人間は整然たる方式・秩序にしたがって網の目のように結ばれ組織された親族・家族を形造っている。このように他の動物とは違う親族集団を作る理由は次のような事実にもとめられよう。(1)ヒトが意識・判断力・意識を伴う愛情をもっている。(2)性生活・生殖・哺育の面でも、一定の役割分担を含んだ集団を作って生活するのが合理的である。(3)ヒトは外敵からの脅威・自然の脅威からの防衛、病気、老齢化などの事実からも集団で生活する必要がある。(4)衣食住を確保する経済生活を営むにも性別

・年齢・世代差などから集団生活が望ましい。ヒトはまたもともと個体だけで生存する能力がきわめて小さい点からも集団生活をする必要がある。

ここからわかるように生物的な本能・生殖活動を核にするのでありながら、高度の意識性・制度化を伴うかたちで親族は形成される。そのなかでチチ・ハハ、親子、姉妹などの集団内での位置づけが明確になされ、性別・世代別の役割分担、協力関係、権利・義務関係なども細部にわたり規定される。このように親族は性・生殖を軸にして組織されるが高度に意識的に形成される面がある。そのさい生存のために必要な他のさまざまな面も配慮されることが多い。経済や互助・防衛面の配慮もなされる。その点からすると親族は経済活動等のための制度である面もある。ただしこの点から親族・家族・氏族などの「自律性」を見失うのは正しい理解とはいえない。経済生活の必要だけからいえば当然ながら、集団の形成は必要であっても親族という形をとる必要はない。防衛等との関係についてもほぼ同じことがいえる。他の諸側面への配慮もあってのことながら、性・生殖・哺育などの血縁的な関係が基軸になっていることは否定できない。

未開社会では親族関係は生産関係でもあり社会形態でもあるというように、人間の社会生活の他側面に強く関わりを持っている。ゴドリエはこの点を次のように表現している。「ここでわれわれは、同時に下部構造および上部構造として機能する親族関係に出会っている。親族関係は事実、生産条件や資源への個人・集団の接近を調整しており、婚姻を規則づけており（人口条件が許す限りで）、政治的・儀礼的活動の社会的枠を提供しており、さらには人間相互間の関係と自然との関係とを同時に表現するためのシンボル的コード、イデオロギー的図式としても機能している」[8]。親族が基軸になって社会生活が営まれる未開社会ではたしかにこのような事情が目立つ。ただ農業や牧畜など

が発見されいわゆる「農業革命」が起ったのちのある地域では、近年の何千年乃至は一万年の期間には経済生活・互助のための集団としては親族とは異なる地縁共同体が中心的な役割を演じるようになった。それだけ親族・家族などの血縁共同体が社会生活において演じる役割は一定の範囲に限られるようになった。国家・階級などの支配関係が社会生活に蔽いかぶさる状態になれば、この傾向はさらに増幅される。さらにつけ加えると近代の資本主義社会では、経済生活・医療・教育などが各種サーヴィス商品経済関係によってあるいは公共団体・国家機関などによって行われるようになるために、共同生活を営む親族が小規模になりまた親族・家族成員内の互助等の活動の内容も薄くなる傾向がある。

このような事実を考慮するなら親族が個有の根拠があって発生・形成されるものであり、その自律性をもつ——他の社会関係との相互作用によって影響を受け、歴史的にその形態・規模・機能に相違が生じることは否定できないが——ことが理解できる。反復することになるがもちろんそれは生産力・生産関係などを内容にする経済機構から派生するものであったり、その反映形態にとどまるものではない。

宗教・思想・文化

つぎに宗教について見てみよう。宗教は自律性を有する要素・構造であることの認識がここでも重要である。宗教はたんなる「夢幻境」(マルクス『資本論』①大月書店九八頁)、精神の錯覚、あるいは経済生活ないしは現実生活の反映形態であると片付けてしまうわけにはいかない。そのように解しては殆んどすべての社会あるいは時代に宗教が発生・存在し絶えないという事実の理由を見失ってしまう。最近のイラン革命や社会主義国での宗教の根強い存続

にも宗教の根元性の証左を見出すことができる。宗教は人間が生存し社会が存在するということに伴ってその独自の源泉から影の形に沿うように発生することが多い。何故だろうか。端的にいえばそれは人間が発達した脳・脳細胞を持っている点にもとめられよう。他のすべての動物は宗教を持たないが、ひとり人間だけがその発生以後のいつからかかなり早い時期に、すべてがといえる程に宗教を生み出している。おそらくそれはヒトがその頭脳から生みだしたものであろう。財貨のようにヒトの手や足の作業によって労働によって作り出されたものではない。あえていえば脳細胞の活動によって神が想い画かれ、神話が作り出され、儀礼が定められる。

このように宗教は頭脳によって生み出されるが、それが生み出される理由もヒトが発達した脳を持っているからに他ならない。脳の機能によってさまざまに微妙な心の動き情緒のゆれ動きがあり想いがめぐらされ考えられる。そのために宗教が発生するのである。道具を使い音声によってコミュニケートする動物はあっても宗教を持つ動物はない。その理由は上述のように宗教はヒトが高度に発達した頭脳を備えるようになったことにもとづくからである。(1)未開社会では人間は一つの生物として、大自然のなかに群れを作り社会を作り肩を寄せ合うようにして生きている自然界の暴風雷雨、地震、洪水、干魃、砂嵐、鋭い寒気と焼けつくような暑気と大自然の容赦ない変転に曝される。比較的自然条件の良い場所でも気候の如何は農業の作柄に大きな影響を与える。他の動物や害虫の襲来に曝されることもあるし、他の部族に襲われることもある。種々の病気に羅って苦しむことも多い。無数といってよい程のこの種の危険に人間は強い不安感を持つ。何よりも恐ろしいのはヒトも生物である故に死を免れないことである。ところがヒトは他の生物が死について深く恐れることがないのに対し、これについてつねに云い知れぬ深い恐れを抱く。その理由はもちろんヒトが他の動物に比して特異なほど発展した脳を具有する生物になったがためである。そのためにヒト

の心は自分自身の存在が死によって絶たれることにかんし強い不安感を抱く。科学が発達して人間は何故死ぬか理由がはっきりしても、それで人間が死を逃れることはできないから、死ぬのではないか死んだらどうなるかという不安からはなかなか脱け出せない。科学・医学が高度に発達しかりに理想的な社会主義・共産主義が達成されて社会制度が改革をみたにしても、おそらくこの不安から人々は容易に解放されないであろう。パスカルのいうように人間は「考える葦」であり、意識・精神・心を持つが故にこのような不安感・不幸感と常に同居を強いられている。

(2)ヒトは意識を持ち願いを持ち目的を持ちうる生物である。ところが人間・自然・社会この世の総てのことは不確定であり、偶然の成り行きに左右されることが多い。将来について総てを見通すことは難しい。そのことを知ってもヒトは願いを持つしまたその願いが達成されることを期待する。そのために大きな力をもった何物かに縋ろうとする。

(3)ヒトは思考力を持ち言葉の創出に見られるように抽象化・類型化を行う能力がある。そしてトーテムや偶像等の例にみられるとおりシンボルを生みだす強い傾向をもっている。もちろん何故だろうかと疑問に思う心、好奇心、因果関係を考えたり物事を納得いくように理解しようとする心・性向を持っている。たまたまそう努めるからではなく、おそらくヒトの脳の構造・機能がそのような性質を備えているのであろう。このような人間性が底にあるために人類の二・三百万年に亘るといわれる歴史のごく最近の数千年の間に、というよりはごくごく近年の数百年間に至って科学の驚くべき発展を生み出したと考えられる。物事に疑問を持ちそれに可能な範囲で納得の行く答えを得・物事の道理・構図を得ようとする心がヒトにはずっと働き続けていたのであろう。そのようなかたちで人間はつねに心の安定化を図る必要に迫られてきたといえる。人間は身体を保全するために住居を必要とするように、意識・心・精神の

ための住処をどうしても必要とするのである。イデオロギー・思想がある意味でそうであるように、というよりはもっとずっと密接不可分な関係で「宗教」がその心の「住処」として築き上げられ用いられてきている。言葉を換えればヒトは絶えず世界観をもとめる。その世界観として、意識・精神の力によって宗教が一種のイメージ・概念・論理あるいは規範・倫理として作り上げられる。

これらの諸点は未開社会の部族・親族などの有する人格神・アニミズムあるいは多神教・一神教など無数の原始・自然宗教においても、キリスト教・仏教・回教・儒教などのM・ウェーバーのいう「普遍主義的な宗教」[9]においてもおおむね共通する。この側面では宗教は一口でいうと、精神による精神の、あるいは意識による意識の救済の装置であるといえよう。ウェーバーが宗教を「救済財」[10]と規定しているのは卓見である。ところで原始宗教では上述の諸点のほかに、(1)親族・部族の神を崇めることによって共同体の成員の帰属意識を強め結束を図る。(2)穀物の収穫が多いことを祈り、狩猟の獲物が多かったことを神に感謝するというように、社会生活、経済生活に宗教・信仰が絡むことが多い。この面では宗教は実生活の必要に関係して営まれるといえようが、それも経済生活なり社会生活なりがやはりヒトの意識を媒介にして営まれることや、その限りにおいてそのような活動も前述のとおりさまざまな意識・情緒の不安定性を伴なうほかないことにもとづく。根本的にはヒトの脳が発達しそれに起因してヒトに特有の情緒・心理の問題が不可避的に生じる事実に、宗教の発生の原因がもとめられる。たんに食べるため、経済生活の必要があるために、宗教は「幻想」として生まれるのだと解したのでは皮相な理解に終始してしまう結果になる。まことに「人はパンのみにて生きるにあらず」なのである。ヒトは高度に発達した脳を持ち心・意識・魂を持つがゆえに宗教が根強い基盤を持つ。ついでながら一言、その発達がじつは他の動物に比してきわめて高いというにとどまり中途半

端であり、その意味では発育不全である。けっして神のような頭脳・英知を持ちえない。そのことが人類の発生いらい今日に到るまでの無数の悲喜劇の原因であるともいえよう。

ところでウェーバーはつぎのように述べる。「こうした地域とか部族とか国家とかのもつ限界が、普遍主義的な宗教によって、換言すれば、唯一の世界神をもつ宗教によって突破されたときにはじめて、問題が生じてきた。しかもその世界神が「愛」の神とされているばあいには、同胞関係の倫理を基盤とする救いの宗教にとって、政治的秩序との緊張はこの上もなくきびしいものとなるにいたった」[11]。原始・自然宗教[12]と異なる歴史時代に入って以後のキリスト教や仏教を「愛」の神をもつ世界宗教とウェーバーは規定する。たしかそれらの多くが部族・氏族・民族――儒教などは別として時に階級差等も――を越え人間を同胞として把え、人格化された神が人間に対する「愛」を持つと説く。キリストや釈迦らの宗教的天才によってこのように洗練され人間的に作り換えられた「普遍主義的な宗教」は人類の「救済」を目標にする信仰であり世界観であるといえよう。それらは人間の魂の救済のための命題・論理であり信仰である。その意味で前に記したとおり心や精神による救済のための論理・装置・ピラミッドであるとされてよいが、問題はこれらの宗教と人々の現実の生活との関係である。部族のアイデンティティを固め、農耕や狩猟の豊かなることを祈るという側面は原始宗教に較べかなり薄くなっている。その反面、これらの宗教についてはその当時すでに各所に成立出現している国家による支配、階級差にどう関わっているかという微妙な問題がある。「愛」の神の前に人々の同胞としての福音を説くことは、王による人民の統治や収奪、少数の富める者と貧窮にあえぐ人々の隔差を否定する側面をもつ。したがって農耕・牧畜の始まった時代に入ってから人類の間に発生したいちじるしい不平等の固定化に、宗教者が強く反撥している――少くともその創始者とその使徒らにおいて――ことは明らかに看取でき

る。これを徹底するとこれらの宗教は国家を解体し、階級差を除去することを目指す変革のイデオロギーであると解されそうでもある。古典古代の奴隷制・地主制あるいは集権的権力による「アジア的生産様式」（マルクスないしはサミール・アミンのいう「貢納制諸生産様式」[13]）の変革を提起する思想、人間解放の教義と解されそうな気もする。そうであればこれらの宗教は原始宗教が一面において持つのとまた別の意味合いにおいて、現実の社会の政治・経済面との関わりから生まれ構築されたといえそうにも見える。――宗教はまた中世のキリスト教、日本の仏教のように支配のための教化手段として利用されることもある。――このような側面からすれば宗教は現実の社会生活の仕組み・状況に対応して、その一種の反映形態として生じたといえそうでもある。しかしこれらの宗教は現実の政治・経済の内部に立ち入ることは余りしない。どちらかといえば「カエサルのものはカエサルに」と、「地上的秩序」と宗教的な救済とは別の次元の事柄と解する傾向が支配的である。

ピューリタン革命など一部の事例を除くと、宗教が「地上的秩序」の変革に積極的に関わっていくことは少ない。多くは人間愛・隣人愛・同胞愛を訴えかけるにとどまる。全知全能・万象創造の神の存在や神の愛を信じ、神への帰依によって人間は救われるのだと説くのである。これらの世界宗教は原始宗教に内在する呪術的・実利的な側面を薄め、人間愛を高揚し神による救済を訴える。人間の心に潜む魔性を出来るだけ抑え神性の側面を伸ばすことに努める。総じて宗教は病む心・悩める魂への救済の論理・機構として生み出され育てられたといえよう。

以上から知られるように宗教は人間の社会生活・経済生活への便宜として役立つ側面もあるとはいえ、主には魂による魂の救済の装置としての性格を有している。人間が発達した脳を持ち不可避的に独特の精神生活を営むようになることが、人間に特有の宗教活動を根強く生みだす。人間の独自性からすぐれて観念的な出自と装置を持つ自律的な

要素あるいはシステムとして宗教は形成され再生産される。「阿片」(レーニン)、「夢幻境」(マルクス『資本論』)といって簡単に片付けられるものではない。宗教の考察から次のことが判明する。この社会的要素はその自律性を持つ、とはいえ経済や社会・政治などとも交流をもつ。別の角度からいえば、宗教は経済・社会・政治などと関わりを持つけれども、他方では特有な要素システムとして「自律性」を有する。したがって社会の構造や変動、その歴史法則を掌握するためには忘れられてはならない特殊な要因と解される。

ところで思想・芸術・文化などの意義はどうだろうか。思想は多くゾレン・当為と結びつき、芸術・文化は社会・政治・経済など実際の社会生活とさまざまなかたちで結びつく面がある。とはいえそれらの活動・所産は、人間が細やかに感じ深く考えうる動物であるということに強く結びついており、発達した頭脳の働きがあって始めて創り出されうる人間に個有の所産にほかならない。それらは宗教に似てそれぞれ自律性をもち特有の形成・伝播・共鳴のメカニズムを持っている。この辺の事情にはマルクスも注目している様子があり、[14] 当然ながらこれらの所産をすべて経済＝生産力・生産関係等によって規定されたもの、その反映形態と結論してしまうことは許されない。マルクスのいわゆる上部構造には、それぞれ自律性を有し個有の存立の理由を持ち個有のメカニズムをもつ多様な要素・システムが含まれていることが判明する。

政治・支配

社会の仕組みと変動変化を理解するためには、支配・政治の要素・システムの存在を無視するわけにはいかない。支配のシステムは経済や社会宗教など多数のシステムと密接な関係をもつ。ただこのような側面に支配のすべてが吸

収されるわけではない。支配はそれ自体として発生・存続する強い誘因・理由があり自律的な運動・機能のメカニズムを有する。他の要素システムとの「相互関係」の契機の存在を考えれば「相対的自律性」を有するといえよう。この事情はこれまで考察してきた諸要因をも含め社会のすべての構成要因について存在する。ところで社会を構成する人間の間の支配・被支配関係を支える要素は何であろうか。エンゲルスは国家による支配を「公的暴力」の装置として捉えレーニン（『国家と革命』）はその側面をとりわけ重視した。当然ながらこの側面はウェバーによっても肯定的に把えられている。支配と国家とは重なっている部分も多いがそうでない面もある。ここではとりあえず「支配」を問題にするとして、それを支える主たる柱は(1)組織的暴力等の恐怖による強制と(2)「支配の正当性」さらに(3)余剰の存在との三つである。恐怖による強制によるだけでは支配はなかなか安定的たりえない。支配とこれに対する服従を納得し正当とうけとめる意識・心理があって始めて支配が安定化する。このことはウェーバーが強調するとおりであろう。

このような観点から支配を類型的に把握すると、(I)職能的支配、(II)カリスマ的支配、(III)身分的支配（「伝統的支配」——家産制的支配・封建制的支配・家父長制的支配、(IV)合法的支配、(V)暴力的（独裁的）支配に類別化することができようか。おおむねはM・ウェーバーの類型化に沿っているが、若干異なる点について見る。(I)の職能的支配とは未開社会の部族あるいは未開社会と限らずさまざまな社会共同体においてその集団にとって必要な特定の職能を遂行することと結びついて生じる支配である。未開社会にみられる長老制や首長、司祭などについてこのような支配が成長することがある。ただしこのばあいは支配の範囲・強度は余り大きくなくまた支配権が世襲されることは少ない、この職能の担当も終身制であるとは限らない。がいして軽度の支配にとどまる傾向が強い。暴力的支配を挙げたのは、

クーデターあるいは植民地支配などのように武器・暴力の威嚇による直接的な支配を念頭においている。この種の支配にも支配に正当性を与える種々の努力が行われることは多い。しかしすべてが他の支配の類型に還元され尽すとは限らない。

ウェーバーが重んじるのは(II)〜(VI)である。(II)のカリスマ的支配は支配者の非日常的な資質に対する被支配者の心服・帰依によるとされ、一部はわれわれの(I)職能的支配の司祭や軍事的指導者などのケースにつうじる面がある。われわれが(III)の身分的支配と呼ぶのはウェーバーにより「伝統的支配」と規定されているものである。君主制にせよ封建制にせよ日常的な慣習とされ「伝統主義的権威」によって支えられている。しかしこの種の支配がとりわけ強大な上下関係、支配と服従関係を軸にしている点からすれば、それに正当性が賦与されているのは慣習・伝統による面もさることながらもっと内面的なものがあると考えられる。「人格的なピエテート関係」が支配の軸になっている点では、支配者と被支配者との間に人格的・身分的な上・下関係が厳として存在することが示されている。君主あるいは領主は特別の出自の身分的な階層に属するとみなされることがピエテート（崇敬）の念を持たせる理由であり、支配に正当性を与えることになる。身分的支配のなかにはエジプトやインドなどの東洋的君主制的支配・家産制的支配の型もある。またその間にヨーロッパに見られたように、君主と諸侯との間のギブ・アンド・テイクの契約関係を含むピエテート関係が媒介項として入る封建制的支配もある。

合法的支配は合理的に制定された法令・規則などによる支配である。このタイプは近代になって支配的となるがギリシャの民主制にもこの型はあてはまる。合法的支配にも制限民主主義・大衆民主主義・官僚制・独裁制などの支配の類型があるといえようか。後二者になると形式的には合理的な法規の制定をとおすのであるが、その実態は特定の

集団あるいは個人の恣意的な支配である。

既述のとおり支配は国家をとおす支配に限られない。そのほかにも教団・結社・組織・家族・企業など各種の集団あるいはその他の人間関係においても支配関係が成立する。

しかし身分的支配――家産制的支配や封建的支配、合法的支配あるいはカリスマ的支配は、社会形態の歴史的変化あるいは社会形態の如何に深い関係がある。家産制的支配は東洋的君主制、絶対王制に重なる面が顕著だし封建制的支配はヨーロッパ中世の封建社会や日本の封建時代に重なる。「合法的支配」の多くは資本主義社会さらには現代社会主義に重なっている。そこで問題になるのはこのような支配形態の性格や如何という点である。それらは史的唯物論が主張するような経済的下部構造――特定の生産力水準とそれに対応する生産様式――によって根拠づけられ規定される政治的・法律的な上部構造なのであろうか。それとも上部構造それ自体としての自律性を有するものとして発生・存在するのであろうか。これは歴史観・世界観の如何に関わる重大な論点となる。史的唯物論をリジッドに解すると国家・政治的上部構造は経済的な面での支配階級の手段「被抑圧階級を搾取する道具」(レーニン『国家と革命』)と解されることになる。政治的な支配関係・国家による支配は、はたして生産関係・生産様式の派生形態と判定しうるのであろうか。この点は見解の対立が見られなかなか難しい。

近代において資本主義的生産様式が成立発展することに対応し、身分的な支配が減退しかわって「合法的支配」が一般化するに至ったことはたしかに顕著な歴史的事実である。自由な契約にもとづく商品経済の一般化と身分的支配とは矛盾する面がある。そこで法的な秩序が占める範囲がしだいに拡大する。あらたに政治的な権力を握るブルジョアジー(また近代化しつつある土地所有者階級)も、むしろ身分的支配にかえて「合法的支配」の面を増やすことで

得る点が多い。かくて国家による直接的統治は法による統治の形態に転換していく。資本主義経済・資本主義的生産関係が支配形態を規定する大きな規制因となったことは明らかである。とはいえこのばあいにも政治的支配が経済関係・下部構造のあり方によってだけ規制されるとはいいがたいのであるが。[15]

歴史時代に入ってエジプト、メソポタミヤ、インド、中国などに広範に成立し何千年かの長期に亘って存続した家産制的支配・専制的君主制の性格はどう解されるであろうか。それは支配形態として自律性を有するものであったのだろうか。その停滞性から推してひとたび成立した中央集権的な支配体制が社会と人々を強力に拘束しつづけ、経済的・社会的・文化的にも変動が封じられたと解される理由がある。この面では支配形態としての自律的な機能がありそのシステムが自律的に再生産されていたと判断される。問題はこの種の中央集権的強権的な支配体制がどのような理由から人類史の二、三百万年の永い歩みののちにこの時期になって始めてまた東洋のこの地域にだけ――ヨーロッパやアフリカではなく――出現したかである。このことを考えるときに今から数千年前にこれらの地域において農業が営まれるようになったこと、いわゆる「農業革命」が起こった事実を無視するわけにはいかない。それによって一定の地域からかなり恒常的にまた集約的に穀物・家畜などが獲得可能になった。また剰余生産物も獲得し易くなりその形成が積極的に行われ財の蓄積もすすむようになった。交換もより頻繁に実行されるようになった。村落が作られ、定住によって人々の生活には意識性・計画性が強められるようになった。生産のために使用される道具が作り出され、開墾や灌漑・治水が実施されるようになった。親族にかわって地縁共同体の演じる役割が大きくなり、隣接する共同体の利害の調整も未開の時代に較べてより重要になったであろう。共同体間の協力も重要になったであろう。周辺の異民族の侵入に対して[16]自らをまた自らのテリトリーをいかにして守るかが忘れることができない課題となった

であろう。

「農業革命」によって剰余生産物の恒常的な産出が可能になったことや大規模な水利・灌漑事業が必要を増したという経済システムの構造転換とある一定の時間の経過ののちにこれらの農耕地帯のなかに専制的な君主制が現われたという歴史的事実とが重なり合うように見える点がある。そこからウィットフォーゲルが唱えるように水利・灌漑事業の必要がそれを担当すべき専制的な国家権力を生みだしたという理論も生まれる。この点についてはフリードマンが次のように述べている「国家形態を伴わない集約的灌漑農業の諸事例が存在することを度外視してみても、集権国家と大規模灌漑とが結びついている諸地域では、社会的階層が大規模灌漑に先行するものであることについて、広範な証拠が存在する」[18] フリードマンの指摘は傾聴に値する。大規模灌漑が必要と感じられるようになる事実があるにしても、その担い手は地域共同体ないしはその連合でもありうる。未開社会について人類学が教えるように――例えばレヴィ・ストロースが明らかにした婚姻の規範が部族クランなど――の友好関係の維持を顧慮したものとされるなど共同体間の関係について人間は大古以来いろいろな角度から腐心してきた。このことから推してもそのような協調が全く不可能というわけではなかろう。かりに集権国家によって水利土木事業が行われたことを直視するにしても、強権による収奪という歪んだ関係を軸にして始めてそれは実行される。この事業にしてもより確かな収奪を目標にして実施される面が強いであろう。階級関係とりわけ国家の成立は余剰の経常的な産出可能性という事実と結びついていることはたしかだとしても、このことだけから必然的に、いわば経済的必然性にもとづいて支配が生じるのではなかろう。

大規模灌漑の必要が増すということから集権国家による支配が必然化するわけではないであろう。

このような支配の発生と発展とは、本源的にみて経済システムとは別の次元での必然的な動きの帰結として起こったと解さるべきではないか。ヒトのヒトに対する支配・服従の衝動は、個人間にあっても集団間にあってもはなはだ強い。未開社会においても支配の芽はみられるし、また支配が成立しうることはすでに述べたとおりである。ただその動きは共同体的な抑制機能等によってある範囲内に抑え込まれ強度の階級関係・国家権力にまで膨脹することは比較的少なかった。ところが農業革命を経たのちになると、人間が一定の地域に密集・定着して生活するようになったことや「余剰」が発生し富の蓄積がみられるようになったこと、武器が開発され人知策略が発達したことなどから一定のテリトリーとそこに定住する多数の人間を武力によって服従させ、支配することが容易になり、また支配者にとってもその誘惑が非常に大きくなった。いったん征服・支配が実行されると国家は「国家機関・国家権力（……）を中核にしながら、それとその支配下における人民・土地・財宝との交互作用を含む総体[18]」としての形状を整える。つまり筆者の命題に従えば「国家機関・国家権力⟷人民・領土・財宝」の範式で把握される内容を国家は含むようになる。さらに進んでいえば、国家はS（国家機関・国家権力＋人民・領土・財宝）⟶SあるいはS'の再生産ないしは拡大再生産を行う運動体である。「しかも通例はその拡大再生産をもとめ、国内での国家権力の増強ときには征服・戦争によって（領土・人民・財宝）その他の国家的な富の大がかりな増大（S～S'）をもとめる[19]」強い傾向を有する。征服・戦争の繰り返えしによってオリエント・アジアに強大な専制君主制国家・巨大な家産制国家が成立した。

農業革命を経ることによって生じた多様な社会・経済・軍事上の諸条件が人間と社会に内在する支配のメカニズムの大がかりな発動を許した。専制的君主制・家産制的国家の成立は経済システムの発展の文脈においてではなく、何よりもまず「支配」・政治の文脈において把えられねばならないと考えられる。ところで成立した支配の内容として

は君主制の政治的な支配権力の成立だけではなく経済的な支配・収奪・経済的な権力の成立も含まれるとみてよい。国家権力はその傘下におかれたテリトリー（領土）・人民（臣民）・富・財宝を制圧し強力な支配力を発揮する。人民をその裁判権下に服させ兵役・賦役その他の労務・奉仕や強い貢納を課す。この種の国家権力は人身的な支配権と経済的支配権との両面を持つ。後者の側面はもちろん経済システムに関わる。はたして農耕を基軸にする生産力に対応する経済的支配、アミンのいう「貢納制諸生産様式」、マルクスのいう「アジア的生産様式」がまず優れて経済的な制度として成立し、それに対応する政治的上部構造として専制君主制の政治的支配が成立するのであろうか。貢納に象徴される経済的支配・自体が人格的支配や領土の制圧に支えられて始めて成り立つ。このことからしてもそのような構造ではなく、むしろ人身的支配・政治的支配がまず成立しそれに支えられて経済的支配も支配の一側面として成立する。そしてこの二つの支配の側面は互いに支え合うかたちで集権的な家産制的支配を形造っている。組織的暴力を主軸にする人身的支配が集権的支配の一次的要素であることが注視されねばならない。

詳述を避けるがヨーロッパの中世に象徴される封建制についても同じことがいえる。王と封建的諸侯の契約にもとづくギブ・アンド・テイクの「誠実関係」（トロイニベツイーウンゲン）[20]を軸にする政治的な封建制的支配関係が一次的要素になり、これに支えられるかたちで経済的な性格の領主――農民の収奪・被収奪関係が成立するという構造である。その逆の下部構造（生産力・生産関係など）――上部構造の社会構造ではないのである。政治と経済との関係は総括的に捉えると資本主義のばあいとは逆の感じになっている。すすんでいえば資本主義時代がいささか例外的で社会主義・古典古代・未開社会など他の社会ではほとんどが政治・支配が社会形態のいかんを具体的かつ直接的に規定する積極的な要素なのである。もちろん農業革命が強固な支配の成立の環境をなすという意味では生産諸力の水準如何が社会形態決定の重要

な要素であることも否定できないのではあるが、この辺の事情を顧慮すると、「より一般的には、人口的・技術的・環境的な所与は、ある社会編成体の実在を説明するために、必要ではあっても充分ではないということを、われわれは強調したい。反対に、社会システム自体の諸特性は、その発展の決定においても、所与の技術の制限内にあるその現在の行動の決定においても、決定的に重要なのである」[21]という、フリードマンの所見にはたしかなる手応え・重みが感じられる。

政治・支配に関わる上部構造は経済システムの単なる反映形態にとどまるものではない。それは最近の数千年位前に文明化された地域の社会状態を直接的・能動的に規定することが多い重要な要素である。ついでながら指摘しておくとそれは宗教・親族などに比して通例はより強い規制力のある要素と判断できる。経済と政治・支配の関係にかんしては上述からも感じられるとおりなかなか微妙な点がある。これらの諸点は行論のうちに詳述する予定である。いずれにしてもここで確認しうることは政治・支配がそれ自体として自律性をもつ一つの要素・システムである点である。この点を根元に遡って考えるとヒトには他の動物だけでなく他のヒトに対する根強い支配の衝動が内在している。われわれはこれから目を逸したいがこれは恐らく否定できない真実であろう。さらに大古以来、共同体の抑制によってあるいは倫理・宗教などの力でヒトはこれを抑え込むべく努力してきた面があることもまた否定されない事実である。しかしこの衝動はある条件の下ではなかなか抑え込めない程にヒトにとって根元的な内的傾向なのである。[22]もう少し踏み込んでいうと人間が発達した大脳をもち意識性を強めるに至ったためにこの支配の誘惑・衝動は他の多くの動物より強くなり、また支配のための行為が狡知を極めるものになりやすい。人間性のこの部分から歴史時代を特有に彩る無数に近い事件・変動が起きたといえよう。ちなみにE・フロムはこれを人間に内在するサディズム的衝

動によると説き、またその対極にマゾヒズム的衝動もあり、「サド・マゾヒズム追求」の図式で人間社会に支配・被支配関係が根強く定着する傾向があることを見事に抉り出している。[23] ウェーバーの支配の「正当性」もより根元的にはこの人間性の内面の真実に関連づけて把えられるべきであろう。

以上の上部構造的な諸要因の性格吟味をうけて、下部構造ともみなされる経済についても言及しておくことにしよう。筆者が経済学を専攻する立場にあるために普段はいきおい経済に触れる機会が多い。また残りの紙幅も少なくなったので本稿では手短かに記すにとどめよう。経済活動が人間の生存にとって欠かすことができない要であることは明らかである。たしかほとんどすべてのばあいに、経済が政治や宗教・社会集団・親族などの要素と絡み合って営まれていることは否定できない。とはいえ人間・社会の存続のために、生産と分配・消費などの活動がそれ自体一つのシステムとして営まれることがもとめられている点はマルクスが強調するとおり自明の理である。ポラニーは市場経済が支配的になった資本主義の時代に経済がさまざまな社会の非経済制度から「切り離された」が他の時代には経済はそれらのなかに「埋め込まれ」ていたことを重視する。そのポラニーにしても、「実体的＝実在的意味」の経済があらゆる時代に存在することは認めている。経済の自律性は否定しがたい事実である。

問題はそこから進んで社会の全体構造のなかで経済システムがどのような位置を占めるかにある。ウェーバーやポラニーあるいは人類学・社会学・政治学大方の歴史学等々のサイドは経済が第一義的な規定要因であると考える見方に種々のニュアンスの差はあれ疑問を感じている。これに対して史的唯物論を形式的に理解する人々は経済がすべての社会関係の「土台」であり第一義的な規定要因であると判断する。種々の留保条件を付してであるとはいえ史的唯物論を絶対視する風潮は、今日の思潮においても意外な程に根強い面がある。これと同列に並べられないが種々の限

界を認めつつも一定の枠内で史的唯物論を守り抜こうとする流れもある。「一方では生産様式（経済的）による最終次元での決定があり、他方では上部構造の相対的自律性とその独自の有効性がある」[24]とするアルチュセール、バリバール、ゴドリエらの印象的な努力がある。

次稿への展望

このような論点をも合わせ続稿でさらに掘り下げた論究を行う予定であるが、ここではこれまでの論述を念頭に置きつつとりあえず問題の所在を明らかにしておこう。社会の構造とその変動を決定する因子としては政治、経済、宗教・文化・親族――本稿では論じられなかったが社会も――等さまざまなファクターがある。本稿で吟味するのに努めたとおり、それらの因子はそれぞれ個有の根拠・メカニズムをもち「自律性」を有する。社会現象を追求しようとするときにこの点の明確な自覚は決定的な意義を持つ。ところが社会科学の諸分野の分立のためにともするとこの点が軽視されたり見失われがちになる。見失われないまでも、このことの掘り下げた認知の学的作業が進められている事例は比較的にまだ少ない。

ところでこれらの因子・要因はそれらのたんなる機械的総和において現実の社会を構成しているわけではない。それらは複雑な「相互作用」（エンゲルス）を伴いつつ全体として「重層的決定」（アルチュセール）をもつということができるであろう。それだけではない。それぞれの要因は印象的な個性をもつのである。これらの事情を顧慮しつつ全体としての社会構成体がどのような仕組みを持つか、その変動の法則性はいかなるものとして把握されうるか、これらの論点が続稿の課題として残されている。

（1）　山内昶「未開社会と史的唯物論」（上）（中）（下）『思想』一九八二年五・六・七月号を参照。なおコンスタンチーノフ監修

『史的唯物論』では次のように述べられている。「どんな社会にも、物質的要素とイデオロギー的要素、土台的要素と上部構造的要素を内包しているような多くの複雑な諸現象が存在している。たとえば、日常生活関係と家庭関係は、このような社会現象にはいる。」（邦訳、青木書店第一冊分二一三頁）

（2）ルイ・アルチュセール『甦るマルクス』I、河野健二・田村俶訳一五二頁。

（3）同右一五二頁。

（4）K・マルクス『ドイツ・イデオロギー』古在由重訳、岩波書店二四頁。

（5）同上三二頁

（6）埴原和郎『人類進化学入門』一四八頁。

（7）K・マルクス『資本論』①岡崎次郎訳、大月書店一一三頁。

（8）モーリス・ゴドリエ「生産様式・親族関係・人口構造」山崎カヲル編訳『マルクス主義と経済人類学』一八〇頁、なおゴドリエの所説について『人類学の地平と針路』山内昶訳も参考になる。

（9）M・ウェーバー『宗教社会学論選』大塚久雄・生松敬三訳一一七頁。

（10）同右参照。

（11）同右一一七頁。

（12）原始・自然宗教については文化人類学の多彩な成果から教えられるところが多い。

（13）サミール・アミン『階級と民族』山崎カオル訳や『周辺資本主義構成体論』I II野口祐・原田金一郎訳など参照。

（14）『経済学批判要綱』（第一分冊高木幸二郎監訳大月書店）の「序説」のなかでマルクスは「生産。生産手段と生産関係。生産関係と交易関係。生産関係および交易関係に対応する国家形態および意識形態。法的関係。家族関係」のなかで「物質的生産の発展の、たとえば芸術的生産の発展にたいする不均等な関係」にも触れている。

（15）小林彌六『現代資本主義分析』（下）第二篇資本主義と国家で資本主義国家について記してある。参照されたい。

（16）梅棹忠夫『文明の生態史観』が参考になる。

（17）ジョナサン・フリードマン「マルクス主義・構造主義・俗流唯物論」（『マルクス主義と経済人類学』）山崎カオル編訳所収、一五七頁。

(18) 小林彌六「国家とは何かを考える」『道』⑥九〇頁。
(19) 同右九〇頁。
(20) M・ウェーバー『支配の社会学』III世良晃志郎訳参照。
(21) 『マルクス主義と経済人類学』一六〇頁。
(22) 小林彌六「商品経済観の見直しをめぐる一試論」『筑波大学経済学論集』第十一号所収
(23) E・フロム『自由からの逃走』参照。
(24) ルイ・アルチュセール『甦えるマルクス』I、邦訳、一五二頁。